慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ホツブハウス教授逝く
Sub Title	
Author	生形, 要
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1929
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.23, No.10 (1929. 10) ,p.1501(121)- 1529(149)
JaLC DOI	10.14991/001.19291001-0121
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19291001-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は全理論體系の中に於て些細なる意義を有するにすぎぬ。彼れの平衡價格論は、價値論を前提とせざるのみならず、却つて、價値原因の存在を信ずる思想の誤謬なることを指摘するに與つて力があつた。平衡價格の成立を最も重要視し、經濟問題の總ての未知數が經濟的平衡の一切の方程式に依據すると說く彼れの所說は、假令これに反するが如き論述明言があるにも拘らず、ワルラス學說を理論的に研究するものの信憑すべき重要なる所論である。ワルラスの後繼者パレエトオが限界效用說を棄てて、撰擇理論の上に價格論を說き、明らかに價値論の無用を力說して平衡價格論の擴充を企圖するに至つたのは蓋し自然の道程であらう。

この故に、カッセルはある意味に於てワルラスの後繼者と謂ふも强ち過言ではないとの結論に到達する。必ずしも兩者が同一理論を開陳したと謂ふのではない。ワルラス學說の中に於て相矛盾するが如き理論を整理し、重要なる意義を有する學說を採れば、カッセルの說く所と同一なるのみなず、遙かに精細なる研究が試みられて居ると謂ふのである。即ちカッセルは、ワルラスの平衡價格論を通俗化し、而して理論の統一に於ては當然ワルラスの說くべかりし價値無用論を明言したのである。

（昭和四年九月十五日稿了）

ホッブハウス教授逝く

生形要

左の一篇を草したのは、一に、ホッブハウス教授の靈を奉弔せんと欲する筆者の微意に他ならない。卒爾、教授逝去の報に接し、十分推敲の暇なく、研究行論の徹底を缺くの止むなきに至れる事に就いては、特に讀者諸賢の御諒察を乞ひ、猶、叱正を受ける事が出來れば幸ひの極みです。

一、序
二、彼の生涯
三、認識論上に於けるホッブハウス
四、社會哲學上に於けるホッブハウス
五、社會思想上に於けるホッブハウス
　A　社會學に關する彼の立場
　B　社會に關する彼の見解
　C　彼の自由主義及び社會主義
　D　彼の「調和の原理」

一　序

突如、六月二十七日附英紙 The Times Weekly Edition は、英國社會學界の耆宿たる、L. T. Hobhouse 教授の長逝を傳へて居る（註一）。教授の死は多數の研究家を有する我が國の學界にとりて

も亦、大きな悲しみでなければならない。

英國自由主義最後の理論家として敬慕されたる故教授は、理想的新自由主義に更生した一八七五年以後の英國思想界から、歐洲大戰時代の社會民主主義に移らんとした轉形期に於て、最も旗色鮮明なる思想的貢献をなせし學徒であつた(註二)。

英國社會學界に於て、長老Herbert Spencer（1820-1903）逝ぬてこゝに二十七年、爾來Hobhouseの如き稀に見る宏大なる思想體系の持主は他にあるまゝと思はれる(註三)。

今此處にHobhouseを捉へ來れる所以は、先づ第一に、形式的見地より考察してその思想體系の規模の宏大なるによる(註四)。概して云へば、彼はTheory of Knowledge. Metaphysical Theory of the StateにTheory of Knowledge. Metaphysical Theory of the Stateに於て認識論を說き、Mind in Evolution, The Rational good に於て人性論を、Morals in Evolution, Development and Purpose, The Rational good に於て道德哲學を、Social Evolution and Political Theory, Liberalism, Elements of Social Justice に於て社會哲學を論じ、而してThe Labour Movement, Democracy and Reaction, Liberalism, The Material Culture and Social Institution of the Simpler people, World in Conflict, Questions of War and Peace, Elements of Social Justice, Liberalism, Social Development に於ては社會思想を論じてゐる。

右に依つて知らるるが如く、氏の思想は大規模の體系を整へたる事に於て、現代世界に於て注目すべき學績である。

第二はその內容的見地から察知すれば、彼が實在論Realismの提唱者たること(註五)、社會主義と自由主義とを併せ有せんとすることこれである(註六)。

もと十九世紀後半より二十世紀に亘れる英國理想主義哲學――此の運動の中心人物はThomas Hill Green（1836-1882）である(註七)。――は啓蒙哲學並びに功利主義への反動としてOxford大學を中心として起つたものである(註八)。彼等の思想は壓倒的勢力を持續したのであるが、最近に於て始めて之に對する非難が各方面から現れた。即ち

（A）理想を建設せず徒らに現實を理想化して考ふとの非難。

（B）事物をありのまゝに論ぜずとの非難(註九)。

（C）余りに主知的なりとなすの非難(註一〇)

がこれである。

換言すれば、第一は、あくまで實踐的なる個人的立場の高調これである。即ち彼等は個々別々の個人的精神が考慮せらるべき凡てゞあるとさへ考へた(註一一)この倫理を赴くがまゝに赴かしめたるは即ちプラグマティズムであつて、C. S. Schille(1864) の Humanism は即ちこれである(註一二)。

第二は、實在論の力說これである。即ち、かの經驗的なる諸々の自我が一つの完全なる凡てを包括する永久的自我の斷片的表現なりとするも、斯くの如き自我の二重の區別は、畢竟或はすべてを我の意識とするか、或は經驗を越えたる外界を置くに至るか、いづれかの見解に陷らざるを得ないと見て――斯くの如きは凡べて知識を內的關係（インターナショナル・リレエシヤン）と見て――如何なる精神からも獨立して存在する對象を考へざることの必要の結果なりとし、知るものと知らるゝものとの關係に就いて解釋を與へんとするもの、これ新興の實在論の精神である(註一三)。

斯くして、其處には必然的に經驗論の認識論即ち――個人的、發生的、客觀的、事實的、實踐的、問題的なるもの(註一四)と功利主義の道德哲學とを顧みる運動が起らざるを得ないのである。

Hobhouseは其の思想體系を一貫してこの晩近の傾向を示すものであり、こゝにその研究の內容

價があると云へる(註一五)。

凡そ如何なる大思想家と云へども、其の時代と云ふものを超克する事は出來ないであらう。それは二重の意味に於てである。即ち、一は當面の社會事情に依る制約である。他は其の時代が大いなる歷史の流れに於て占むるところの位置に依る制約である。ホッブハウスの存在は、時代の子としての刻印を捺した人類發展の流れに依つて、時代の影響を彼自身の仕方に依つて消化した上に、彼の個性的統一を與へたる生命發展を通じてこれを再び時代の現在と未來との流れに投げ返した彼の生涯に依つて歷史的意義を持つのである。この意味に於て、今 Hobhouse の思想體系を檢討するに當つて、先づ第一に彼が位置を占めたる時代が如何なるものであるかを明らかにする必要があるであらう。

アメリカの金坑發見が英國に齎らせる結果は一八五二年より始まつた貴金屬の豐富なる供給即ちこれである(註一六)。而して之れに續ける二十ヶ年間は物價上騰及び未曾有の富と繁榮との時期であつた。英國の商工業は絶えず進歩し斯くて一八七〇年以來英國資本主義はその內國資源と外國貿易とに依存して坦々たる生長的向上線を辿つたのである(註一七)。

而して社會主義は――一八三〇年及び一八四〇年代に於ける英國社會運動は、所謂「社會主義」と溫情主義と自由主義との三巴の形相をなして、激流に抗してゐた(註一八)――全く衰滅し、そして一八四八年乃至一八五〇年に於て嘗て無い程の活氣を呈したる社會主義文獻でさへも一八五三年以降は其の姿を匿し、一世代後の一八七三年に於て產業的繁榮策が重大なる打擊を被りたる時まで遂に復活する事がなかつたのである。一八七三年に襲來せる經濟界の不況は工業資本主義發展段階に於ける單なる沈滯ではなかつた。そは實に英國產業の基石の動搖を、即ち資本主義の內的機構の變質を意味し、勞働者に取りては一八八〇年代以後の社會主義の復活を――たとへ復活せる英國派社會主義が純然たる外來的のものであつたとはいへども(註一九)――そして資本家に取りては近代帝國主義の展開を意味したのであつた(註二〇)。斯くて帝國主義資本家の搾取方面轉換、並びにそれに併ふ被壓迫民族の反帝國主義運動が行はれたのである(註二一)。

かくて一八七〇年以後の、特に一八八五年以降の英帝國のすばらしき海外領土政策は相當重要なる眞の白人植民が企圖されてゐない所の地域の征服併合を促進することに、殆んど全く吸收されてゐた(註二二)。即ち一八六四年に生れたる我が Hobhouse が文筆の國へ旅出ちせる頃は、將にこれ世界の資本主義國家が漸く近代帝國主義の時代へ這入らんとせるの秋であつた(註二三)。

今彼自らの述べる所に依つて(註二四)當時英國の雄々しき姿を顧みるならば、自由貿易、平和、節約、自治、民主的進歩の代りに保護貿易、戰爭、浪費、强制徵兵、植民地征服擴張、專制政治、階級立法が地を占めて居た時であつた。斯くの如き社會事情と共に人道主義――功利主義――の哲學に對する知的反動の滔々たる激流が各種各貌の形相の下に存立して居たのである。即ち、或は宿命論に、或は自然淘汰に、或は鐵血政策に藉口した反動思想の或るものが階級利害と結束して近代の文明的進歩の標識を打ち毀さんとして、將に、その猖獗を逞ふせるの時代であつた。

然らば Hobhouse 教授其の人の經歷は如何なるものであつたか。

註　一　六月二十三日發行 Sunday Times, 六月二十九日發行 London News, 八月三日發行東京日日新聞、八月十四、十五日東京日日、並びに六月二十四日廿七日附 The Tims 等該記事參照。因みに Illustrated London News. vol. 174. No. 4706. June. 29. には教授の肖像が出て居る。

註　二　八月三日東京日日該記事。――「逝けるホッブハウス教授」(加藤正男氏執筆)――。

註　三　岩崎卯一氏　社會學の人と文獻 p. 347　松本潤一郎氏　英米社會學（大思想エンサイ一三卷）p. 150. Hobhouse の

社會學は英國現代の社會學を最もよく代表するものと見なくてはならない。寔に Hobhouse の思想體系は Plato, Mill, Spencer, Green の綜合的調和であらう。若くして Kant, Hegel に強く導かれたりとは云へ、氏の社會哲學は Comte, Ward, Mill, Spencer の色彩を帶び、特に Mill の自由主義及び經驗主義、Spencer の Realism の影響を受けて居る。氏の社會科學の歸結は Gaston Richard に類似して居ると云はれてゐる。氏の綜合社會學は――舊型百科全書的歷史哲學的社會學體系――A. Comte, H. Spencer, W. Bagehot, L. F. Ward, G. Tarde を辿つてゐる。現代に於ける科學の基礎をなすものは進化の觀念なりと考ふる事に於いて氏はダーヴイン先驅の一團（ソォルフ・ライエル・ラプレース・パツフォン・ラマルク）並びに Darwin 及び Spencer にこれを學び、而して又 Bagehot, Macdougall, Wallas の社會心理學說をも受け入れて居る。

人類學者としての氏は和闌派社會人類學者、スタイン、メッツ及ひニボーア等と同樣なる進化段階の考察を行ひ而して、MacIver, Cole の共同生活體說、Vierkandt の人的關係說、Tönnies の社會の內容としての Gemeinschaft, MacIver, Russell の多元的國家理論、Müller-Lyer の社會發達の史的段階の分類 Phaseologie に接近してゐるものの如くである。

又調和統一を善とする事に於いて、Bradley, Green に類してゐる。

以上に依りても、大體に於て知らるるが如く、Hobhouse の社會學――（具體的一般社會學）――はその由來する所遠く深く、その包攝する所も極めて廣大である。

實に、氏の學問的洞察は深遠該博であつて、質其何づれの點から觀ても、社會學界近時の目覺しき收穫であると云ふ何人もこれを否定する事はできないであらう。――關與三郎氏、社會學、（ホッブハウスの社會學說）p. 2――

註四　河合榮治郎氏　英國派社會主義 p. 148

註五　E. K. Rogers: English and American Philosophy Since 1800, A Critical Survey 1922. 松本潤一郎氏　現代社會學說研究 p. 322.

註六　H. E. Barnes: Leonard T. Hobhouse and the Neoliberal theory of the State (p. 442-485)—The american journal of sociology, January 1922. xxvii.—及び戸田武雄氏　ホッブハウスの思想體系（經友一二號）一頁。

註七　大島正德氏　近世英國哲學史 p. 340

註八　經濟學論集　第五卷一號　河合榮治郎氏　英國理想主義運動。

註九　理想主義が第二に受けたる批難は Bosanquet の如く國家を以てあらゆる市民の道德的意志の自由なる承認と協同とに基くものとする事は現代の世界に於いては知る能はざる事であつて、理想主義者は事物をありのまゝに見ざるものであると云ふことであつた。

註一〇　凡そ社會及び國家に關する見解は、その內に或る人間觀を前提とする。此處に理想主義の主知主義に對する非難があるわけである。理想主義は倣りに多くのものを意識的意志と理性ある精神とに歸したといはれる。人間には確かに意志と理性の領域が存在する。が然し人間も亦自然陶汰と進化の渦中に置かれた自然の一部分である。又人間は意識的理性と共に衝動、情緒、本能をもつものであり、そこに暗示が働き聯想が行はれ模倣が發達し習慣が生ずる。されば此の領域に對して社會心理學者はその先鋒を向けた。我が Hobhouse は Idealist が稍もすれば理念として人間を見るに急にして現實のあるがまゝの人間を看過したるに對して是等の社會心理學者と共に反對したのであつた。猶 Hobhouse と社會心理學者との關係に就いては Macdougall: group mind の緒言を參照せられたい。尙(A)(B)(C)の三分類に就いては E. Barker: Political thought from Spencer to To-day p. 80-83.

註一一　三浦藤作氏　倫理學說講義　四三〇――四三一頁。

註一二　木下一雄氏　現代哲學要論　四二――　頁。

註一三　大島正德氏　經驗派の哲學二九二――二九三頁。人格的理想主義なる名を以つて呼ばれるのは第一と第二との立場を併せ唱ふるものであつて、ホッブハウスやクレメントウェッブも亦これに屬するが上述の如く第一と第二との立場は英國哲學の傳統であつて多くの場合、この兩者は結合してゐるものの如くである。

註一四　James Seth: English Philosophy and Schools of Philosophy 1912.

註一五　輓近の傾向、即ち英國現代思潮の主なるものは(1)國家至上主義反動としての自由主義及(2)所謂「社會主義」の反動としてのギルド社會主義（サンディカリズムの影響の下に）であらう。實に Hobhouse は J. A. Hobson と共にその第一の代表と目されてゐて彼等は、個人的自由主義及多元的國家理論を取り入れてゐる。猶河合榮治郎氏著在歐通信(p. 63-67)には英國最近社會思想を四分して居られる。即ち

英國現代の四潮流
- (1) 自由主義の復活 …… Hobhouse
- (2) Idealism の反動としての社會心理學派 …… G. Wallas, Macdougall
- (3) 個人主義の復活の反動としての集團人格說 …… Maitland, Figgis, G. H. Cole, H. Laski
- (4) guild-socialism …… G. H. Cole, B. Russell, A. J. Penty, S. G. Hobson, Orage

註一六　山川均氏　資本主義以前經濟史　pp. 143-173.

註一七　渡邊幾次郎氏　現代歐洲政治及社會史 p. 387　船舶の噸數は一八七〇年より一九一〇年の間に實に從前の二倍以上に達したるが如きはその非精を示す。――本位田祥男氏著、英國經濟史要、一八六――一八七頁參照せられたい――

註一八　上田貞次郎氏　近世商業史　p. 81.

註一九　A. Menger: The Right to the whole Produce of Labour. Introduction. Section iii. The English School of Socialists. xxv-cii. 森戸辰男氏譯　全勞働收益權史論　pp. 493-494.

註二〇　河合榮治郎氏著一八七〇年代の英國勞働界　經濟學論集 6 の 1 (pp. 24-25)十九世紀後半に於いて英國資本主義は帝國主義の段階に入つた。斯くて階級對立は所次激化し、組合運動は不熟練勞働者の手に移り、一八九三年最初の無產政黨即ち獨立勞働黨が組織さるゝに至つた。

註二一　バラッチ、上田茂樹氏譯　帝國主義の經濟的基礎――參照せられたい。英國帝國主義の初期に於ては、辛くも資本家は植民地搾取の「配分」を以て內國勞働者を「買收」することによつて、階級對立を緩和せしめ、その政治的進出を二十世紀の初頭まで抑制することが出來た。

註二二　J. A. Hobson: Imperialism.　社會思想全集、三五卷　p. 717

註二三　その頃は、恰も社會問題が目新しく出て來た時であつて、いはゆる新思想が青年の胸に芽ばえつゝある時であつた。社會主義は段々唱導されるやうになつた。その實行的方面に於ては、Hyndmann 等の社會的民主的聯盟があり、その知識的方面では、新らしく造られた Fabian society の宣傳が行はれて居た。

註二四　Hobhouse: Democracy and Reaction. p. 55, p. 95

二　彼の生涯（及び主要文獻）

Leonard Trelawny Hobhouse (1864-1929) Hon. D. Litt. Durham. 1913., Hon. LL. D. St. Andrews. 1919., M. A. Oxford., The Late Martin White Professor of Sociology in the University of London and Fellow of the British Academy(F. B. A.)

彼は一八六四年（元治元年）の冬英吉利の名門 Hobhouse 家に生れた(註一)。彼の尊父 Venerable Reginald Hobhouse は Cornwall 教會並びに Trelawny の Archdeacon（副僧正）にして、小地主の貴族であつて(註二)、又 Caroline Bodmin の Archdeacon をも兼ねてゐた嚴肅そのもののやうな牧師である。彼の慈母 Caroline Hobhouse は Sir William Trelawny の愛娘であつて冒險好きなケルト族の血が流れてゐた(註三)。

一八九九年 Boer 戰爭（英國・トランスヴァール共和國間）に際し單身南阿に航して植民地を視察なし、歸國後、熱心に非戰論を說くた彼の姉 Emily Hobhouse (註四) は教授の生涯の前半に影響をあたゝし事大なる人である。社會運動に關する Hobhouse 教授の功績の一半は彼の姉 Emily に依るものと云ふべきか。

而して斯くの如き兩親及姉を持つた彼 Leonard Hobhouse が、長じて、Oxford に學んだ頃は Spencer の進化論及び Green の理想主義が其の絕頂に達して居た時代であつたのである。

進んで、Marlborough College の "Upper Sixth" に入つてから彼はギリシヤ、ラテン及び歷史の研究を始めた。而して社會運動や哲學、殊に Hegel の歷史哲學の研究に興味を感じたのも、その頃であつたと云はれて居る。一八八〇年 Oxford 大學に進み、一八八三年より一八八七年にかけて

under-graduate として社會政策の問題に心醉し、Spencer に傾倒しつゝも猶 Green に心を引かれて居たのである(註五)。

一八八七年二十三才の折、彼は Merton College の Fellow となつたが、一八九〇年 Merton College より Corpus Christi College (Christ Church College) の assistant Tutor に進んだ(註六)。翌一八九一年彼は G. B. Haldwen の娘 Nora と結婚した(註七)。一八九四年 Corpus Christi College (C. C. C.) の Fellow であつた(三十歳)頃、Oxford 附近の貧しき農民のため農民組合設立に盡す處があつた。斯かる事情のため、Oxford の傳統的なる Tory の保守主義とは意見を異にしてゐたのである。當時、即ち社會運動に關係せし頃の著作としては The Labour movement (1893) や The Theory of knowledge (1896) 等がある。一八九七年齡三十三にして自由黨の機關紙にして又英國自由主義の牙城たる manchester guardian の編輯長 C. P. Scott 氏及び大學の舊友數氏の薦むる處となり、同紙の論說記者となつた。而して同紙を通じ英國帝國主義及び南阿戰爭 (1899-1902) に反對した(註八)。

彼の論說は Manchester 地方の指導精神であつた。斯くして彼の五年間に亘る操觚界の生活が續いたのである。一九〇〇年 Manchester に滯在中 Owens College (現在の University of Manchester) の社會學の教授となり、英國に於ける Comparative Psychology の先驅的文獻 Mind in Evolution 1901) を發表した。同書は綜合社會學者 L. Ward の影響を受くる事が大であつたと云はる(註九)。

一九〇三年に至つて、自由勞働組合 Free Trade Union の幹事長として、自ら勞働組合に携つたが、後再び記者生活に歸つて、今度は Tribune 紙の論說を書いた(註一〇)。

彼は Westermarck の Origin and growth of moral Ideas と殆んど同時に、Morals in Evolution を出版した其翌年即ち一九〇七年、彼は ロンドン大學の組織變更と共に勞働者大學の稱ある最も民主的な同大學「經濟政治學校」(註一一)に迎へられて同大學の社會學教授となり他くまでも民衆と共に考へんとしたのである。教授は全く「街頭の哲人」と云ふにふさはしい(註一二)。而かも、彼の老大なる社會學體系(四部作)は同大學奉職中完成せられたるものである(註一三)。

而して、本年度のロンドン大學暑中休暇を利用して France, Normandy, Orne dep., の首都 Alençon (註一四) に避暑中六月二十一日幽風一過遂に世界的碩學の士 Hobhouse 教授は白玉樓上の人となられた。行年六十六歳である(註一五)。斯くて彼の London 大學教授としての二十三年間に亘る、輝ける生活は終りを告げたのである。生前教授は各地の講演會に臨んだが、一九一一年四月 Giddings 教授の斡旋に依つて米國 Columbia 大學政治學部 (The Faculty of Political Science of Columbia) から英國思想界の一權威としての待遇で招聘せられたるは、注目すべき事であつた(註一六)。Spencer の "The Study of Sociology" に該當すると云はれて居る彼の著作 "Social evolution and Political Theory" (1911) はその講演筆記である。又 Hobhouse 教授は London 大學教授以外に約八つの(註一七) Trade Boards の議長をも兼ねて居たのみならず、英國社會學會の創立者の一人でもあつた。猶英國社會學會雜誌 "The Sociological Review"——以前 Sociological papers と云はれたるもの——の顧問であつた。

以上が彼の略傳である。

（附言）「故ホップハウス教授追悼會」が、六月廿七日、倫敦ストランド街 St. Clement Danes Church に於て、しめやかに催せられ、氏生前の知友、Graham Wallas, Harold Laski, Sir William Beveridge (Director of the London School of Economics), E. Jenks, T. E. Gregory, T. P. Nunn, Vauchi, Bowley, Seligman, Sargent, Ginnsberg, H. C. Gutteridge, J. L. Hammond, Wolf, Rolwell Jones, J. A. Hobson, 等の教授が列席せられた。

而して、翌六月廿八日正午、Wimbledon Parish Church に於いて「故教授の葬儀」がとり行はれた。

（A） 彼の主要著作

(approximately in the order of their appearance)

（1） 1893. The Labour Movement. Preface R. B. Haldane, 1st Ed. 1893, 98 pp.; 2nd Ed, Lond., Unwin, 1898, vii+98 pp.; 3rd Rev. Ed., N. Y. Macmillan, 1912. 159 pp.

（2） 1895. Democracy and Reaction. London, Unwin, vii+244 pp. Republ. in pt. fr. the Speaker. (London. Unwin. Press 1904). (N. Y. G. P. Putman's Sons, 1905.)

（3） 1896. Theory of Knowledge; A Contribution to some Problems of logic and metaphysics. Lond., Nethuen, xx+627 pp. (1) Data (2) Inference (3) Knowledge.

（4） 1901. Mind in Evolution. (1st Ed.) Lond. & N. Y, Macmillan, xiv+415 pp. (2nd Ed.) Lond., Macmillan, 1915. xix+469 pp. (1) The Standard. (2) The Basis.

（5） 1905. Lord Hobhouse; A Memoir (Joint author—J. L. Hammond) Lond., Arnold, 1905, iv+280 pp.

（6） 1906. Morals in Evolution; A Study in Comparative Ethics, (1st Ed.) Lond., Chapman & Hall., (2 vols). New Ed. Rev., N. Y., Holt., 1915, xvi+648 pp. （註、鹽田秀介氏譯道德の進化、未刊）

（7） 1911. Social Evolution and Political Theory. N. Y., Col. Univ. Press, ix+218 pp. (Julius Beer foundation) 12 mo., cloth, (1922. 8 vo, pp. ix+218). （註、土生秀穂氏譯　社會進化と政治理論　大正十二年、社會學研究會）

（8） 1911. Liberalism. N. Y., Holt., v+254 pp. (Home Univ. library of mod. knowl.)　（註、江刺憲四郎氏譯　自由主義不及社）

（9） 1913. Development and Purpose; An Essay Toward a Philosophy of Evolution. Lond., Macmillan, xxix+383 pp. (1) lines of Development (2) The Conditions of Development. (Revised andargely rewritten 1927)

（10） 1915. The World in Conflict. Lond., Unwin, 104 pp. "A Series of articles contributed to the Manchester Guardian during March, April, and May 1915 and reprinted with addition." note.

（11） 1915. The Material Culture and Social Institutions of the Simpler Peoples, An Essay in Correlation, (Joint author with G. C. Wheeler and M. Ginsberg) Lond., Chapman and Hall, iv+299 pp.

（12） 1916. The Question of War and Peace. Lond., Unwin, 233 pp.

（13） 1918. The Metaphysical Theory of the State, A Criticism, Lond., Allen & Unwin, N. Y., Macmillan., 156 pp. (Studies in Economic and Political science—No. 5) （註、鈴木榮太郎氏譯　國家の形而上學的理論（大正十三年）不及社）

（14） 1921. The Rational good; A Study in the logic of Practice. Lond., Allen & Unwin.; N. Y., Henry Holt, xxii+237 pp. （註、鹽田秀介氏譯　合理的善、實踐論理學の一研究(大正十四年)四紅社版、アキア書院版、綠陰社普及版文行社版、　佐藤俊雄氏譯　社會哲學概論(昭和三年)綠陰社版）

（15） 1922. The Elements of Social Justice. London, Allen & Unwin, N. Y., Henry Holt., vii+247 pp. （註、鹽田秀介氏譯　社會哲學原理(昭和二年)　早大出版部）

（16） 1924. Social Development; Its Nature and Conditions, Lond., Allen & Unwin; med. 8 vo, pp. 348.　（註、鹽田秀介氏譯　社會的發達其本質と條件　未刊）

（17） 1924. The Philosophy of Development (contemporary British Philosophy, Personal statements. vol. I. Edited by J. H. Muirhead, pp. 149-188)

（B） 彼の主要雜誌論文

(generalty in the order of their appearance)

（1） "Ethical Basis of Collectivism." Int. Jour. of Ethics. 8: 137-56.

（2） "Laws of Hammurabi; Liv. Age. 237: 250-3. Ap. 25.'03.

（3） "Questions of the Lords," Contemp, 91: 1-11, Jan. 1907.

（4） "Constitutional Issue," Contemp, 91: 312-8. Mr' 07.

（5） "Editorial," Sociological Review. 1: 1-11.'08.

（6） "Prospects of Liberalism," Contemp, 93: 349-58 Mr' 1908.

（7） "Lords and the Constitution," Contemp. 96: 641-51 D' 1909.

（8） "Contending Forces," English R-4: 359-71. Ja.' 1910.

（9） "New Spirit in America," Contemp. 100: 1-10 Jl.' 1911. Same living Age. 270: 323-30. Ag. 5, '11.

（10） "Prospects of Anglo-Saxon Democracy," Atlan. 109: 345-52. Mr. 1912.

（11） "Review of Westermarck's Origin and Development of Moral Ideals," Sociological Review. No. 2 p. 402 '09.

（12） "Social Effects of War," Atltantic. 115: 544-50 Ap.'15.

（13） "Soul of Civilization." Contemp. 108: 158-65. Ag. 1915.

(14) "Sociology as a Study of Corrolation," Sociological Revieu Jan, 1923.
(15) "Many articles in Mind," Int. Jour. of Ethics.
(16) "Law and Justice" in Representative Essays by H. R. Steves & F. H. Ristine. (p. 341-375).

（C）ホッブハウス思想邦文文献

〔甲〕（1）戸田　武雄　ホッブハウスの思想體系（昭和三年十二月經友一二號）
（2）關　與三郎　ホッブハウスの社會學說（早稲田政治經濟學論叢　昭和四年度十八號 pp. 1-58）
（3）松本潤一郎　ホッブハウスの社會學說（社會學雜誌大正十四年十一月一九號 pp. 1-20, 十二月二〇號 pp. 33-48）
（4）松本潤一郎　現代社會學說研究（昭和三年）pp. 322-367.
（5）松本潤一郎　英米社會學（大思想エンサイ　社會學 13）（昭和三年）
（6）古坂　明詮　ホッブハウス（大思想エンサイ　社會學 13）（昭和三年）
（7）河合榮治郎　英國派社會主義（社會經濟體系 9. 10. 11. 12. 13. 15　卷）昭和三年
（8）河合榮治郎　在歐通信（大正十五年）
（9）岩崎　卯一　社會學の人と文獻（大正十五年）pp. 337 405.
（10）鈴木榮太郎　ホッブハウスの社會學（現代社會學叢書）未刊
（11）松本潤一郎　ホッブハウス教授逝く（社會學雜誌第六五號 pp. 91-92）
（12）XYZ氏　ホッブハウスの死（新自由主義第二卷第九號 p. 29）
〔乙〕（1）長谷川如是閑　現代國家批判 pp. 45-89
（2）高田　保馬　社會と國家
（3）中島　重　多元的國家論
（4）浮田　和民　國家哲學
（5）思想名著解題（大思想エンサイ 22）pp. 260-262.
（6）吉田　靜致　道德の原理
（7）金子堅之助　社會哲學史研究 p. 298, 414, 472.——（昭和四年）
（8）市村今朝藏　近世政治思想史
（9）岩崎　卯一　社會學序說
（10）松本潤一郎　ホッブハウス著「社會的發達」（社會學雜誌七號）pp. 101-104.
（11）細貫　哲雄　社會心理學（大思想エンサイ 13）
（12）河合榮治郎　自由主義

（D）外國文献

(1) H. Carter: "The Social Theories of L. T. Hobhouse." 1927.
(2) H. E. Barnes': "Leonard. T. Hobhouse and the neo-liberal Theory of the State." in American journal of Sociology 27: 442-485. Ja. 1922.（鈴木榮太郎氏譯　ホッブハウスの政治理論概要）
(3) A. K. Rogers: "English and American Philosophy since 1800." pp. 348-351.
(4) John Morley: Critical Miscellanies," vol. 4. pp. 265-326.
(5) H. E. Barnes: Sociology and Political Theory. 1924.（新明正道氏譯　社會學と政治理論）
(6) E. Barker: Political Thought from Spencer to To-day. 1924.（小島祥治氏譯　英國政治思想論）
(7) E. S. Bogardus: A History of Social Thought 1921.（笠田長繼氏譯　社會思想史）
(8) L. M. Bristol: Social Adaptation. 1915.
(9) C. A. Ellwood: Sociology in its Psychological aspect. 1912.
(10) Hankins: Sociology (The History and Prospects of the social sciences edited by H. E. Barnes) 1925.
(11) L. Rockow: Contemporary Political Thought in England. 1925.
(12) Sorokin: Contemporary Sociological Theories. 1928.

註　一　彼はレヂナアルド氏の弟である who's who 1929 年版——p. 1455. (pulished A. and C. Black)——。

註　二　H. Carter: The Social Theories of L. T. Hobhouse. p. 8.

註　三　イギリスに於ける社會主義の發展は主としてケルト族又はニグロ民族の血を受けたる人々に依つて行はれたものであつた。かゝるが故にか、ケルト族の血が流れてゐる Caroline をその母とした Leonard Trelawny Hobhouse は、始め社會主義を信奉し漸次 New liberalism へ轉向したのである。cf. A. Menger: The Right to the whole

Produce of Labour. Introduction. 森戸辰男氏譯本 p. 370. 因みに Sir William Trelaway は第九代目の F. A. Baronet にして八〇〇〇 acre の大地主である。

註四　Emily Hobhouse は南アフリカの社會事情研究家の先驅をなせり。cf. Carter: ibid. p. 10.

註五　Hobhouse: Philosophy of Development—Contemporary British philosophy edited by Muirhead vol. I. p. 150

註六　H. Carter: ibid. p. 9.

註七　教授の愛妻 Nora は一九二四年に永眠してゐる。二人の間に長子 R. Oliver Hobhouse (R. A. F) (歐洲大戰に際して飛行中尉として活躍せられたる人) 及び二女の三人の子があります Oliver に關しては Hobhouse 著 Metaphysical Theory of the State, Dedication p. 5-7 參照せられたい。——尙長女は Joan Beighton 氏に嫁せり—。

註八　Democracy and Reaction (1895) は當時の代表作である。同書は一八九五年のソールスベリー內閣の殖民大臣 Joseph Chamberlain 等の帝國主義的統一黨員 (Imperialistic unionists) に對する九個の反駁文から成つてゐる、民主的自由主義を高唱す。

註九　cf. Hobhouse: Mind in Evolution. Preface,

註一〇　一九〇五年勞働組合の幹事長を辭し、直ちに London の The Tribune 紙の論說記者となつたがこれは一年程しか續かなかつた。然し此の一ケ年間に於いて、彼は左翼自由主義の旗の下に Old age Pensions, Trade Boards, Land Reform 及び戰爭賠償金問題等に關係した當時、Hobhouse は Tribune 紙を通じ間接に Lloyd George を援助するところがあつた。

註一一　當式な三つの大學に對抗した Bentham 一派の功利主義の人々に依つて創設されたのがロンドン大學であつた、The London School of Economics and Political Science. University of London. Hougton Street. Aldwych est. 1895. joi 1907.

註一二　故教授の講座は左の如くであつた。

前學期(十月—十二月)　社會哲學、社會學序論、應用社會哲學、

後學期(一月—三月)　社會學序論、應用社會哲學、比較心理學、社會心理學、

尙、ロンドン大學の內容及 Hobhouse 教授の講座については岩崎卯一氏　社會學の人と文獻 (P. 343-344) 及び社會學雜誌(第七號)一〇四頁を參照せられたい。

註一三　岩崎卯一氏　社會學の人と文獻 (p. 376)

註一四　フランス Garthe 河にのぞみ古來 Alençon レースを以て知らる、人口二萬の都市。

註一五　但し滿六十四歲である。而して The Times, June. 27.—p. 1.—に依れば教授の病名は腦出血である。

註一六　岩崎卯一氏　社會學の人と文獻 (p. 369)

註一七　H. Carter: The Social Theories of L. T. Hobhouse p. 11.

三　認識論上におけるホッブハウス

今哲學より社會學に至るホッブハウスの思想體系を述べやう(註一)。

ホッブハウスに依れば、知識の理論は、先づ吾々をして、合理的規準とは何を意味するかといふ疑問を起さしめるものである(註二)。彼に依れば、凡そ合理的といふ事には三つの要件を必要とする(註三)。

第一に、それは矛盾なきことである。矛盾は疑ひもなく不合理であるからである。即ち思想の世界に於て、相互に矛盾する二個の判斷を許し、行動の領域に於て相互に破壞する二個の目的を追求するが如きは不合理である。第二にそれは、根據あることである(註四)。專斷的、即ち無根據の判斷は不合理であらう。何等の根據なくして、判斷をすることは、不合理と云はなければならない。無根據の判斷を避けんとするならば、吾々は、判斷をそれを超克するところのものと連結することが出來なくてはならない。この相互連結の偉業は主たる理性の積極的職分であるであらう。第三に、それは個人的主觀にのみよることなく客觀的なものでなくてはならない、即ち判斷を感動、或は願望、若くは或る「主觀的」態度に依るのは——單に吾々自身から起る所の衝動等の上に根據せしむ

ることは――不合理であると主張される(註五)。

然しながら彼が云ふが如く、客觀的なるものは不幸にして、即時に、誤謬なく、主觀的なものから區別し得る程、明瞭なものではない。如何にして此の區別をするかと云ふ問題に對して Hobhouse は合理性の前記の三要件に依るのであると答へられてゐる。

さて、第一の矛盾ありや、否やは如何にして知らるゝや。彼に依れば、或る判斷があれば、それ以外の他の判斷と連結せしめ、その相互關係に於て矛盾ありや否やを知るにあつたのである。然しながら、これは所謂相對主義であり、積極的に眞理の要件を闡明するものではないであらふ。こゝに於てか、彼の眞理の規準に於て重きをなすものは、其の第二の要件たる根據あることであらふ。されどこゝに根據ある判斷は、眞理なりとするも、彼自ら認むるが如く、この事は根據そのものが正しからざればそれは意味をなさないのである。根據そのものが今や根據を必要とするのである。即ち更らに何等の辯證をも要しない或る一次的の根據がなければならないのである。果して、然らば、此等の一次的根據を肯定する判斷は孤立的判斷であるであらうか(註六)。斯くして Hobhouse が最後に認めたるものは孤立的 immediate judgement 即ち――the most general grounds and the final particular fact ―― ἔσχατα これである(註七)。然らば、合理的根據に對する探求は immediate judgement のうちに終るのであらふか。

斯くて Hobhouse は自然的實在論の古に復歸して「知覺は存在である」と云はんとするのであらふか。否、知覺に於て immediate judgement が窮極的のものならざることは Hobhouse の認むるところである(註八)。

彼は云ふ、「吾々は棒が水中では、空中で眞直ぐなのと特に同樣に、直覺的に曲つてゐる事を見るのである。然し此の場合に於て正しいのは immediate judgement ではない。感官の immediate judgement は更らに試驗、批判、確證を經て確實性を得るものである」と。吾々は常にある判斷から他の判斷へ訴へつゝ其の相互關係を見てゐるのであつて、あらゆる疑問を超越した絶對といふやうな點を發見することは出來ない。

斯くて、思考は質の惡い車輪のまわりをめぐり廻つてゐるに過ぎないのである。寔に immediate judgement が全く無價値であるならば、吾々は當惑せざるを得ないであらふ。蓋し零は如何に集つても零であるからである。然しあくまで調和を忘れず、あらゆる絶對を否定する Hobhouse は感官の immediate judgement に對しても亦、絶對に價値なしとはせず、終極的なるものではないが、暫定的價値を有つ」と云つてゐる(註九)、即ち彼によれば、感官の immediate judgement はそれ自身有つところの或る程度の有力性と明白性とをもつて、吾々に迫り來るものであつて、それは表面的に眞理であり、經驗は斯くの如き判斷が應々にして、相互に矛盾衝突するが故に、訂正を必要とするものであることを示すに過ぎない。斯くて immediate judgement は相互に確證し合ひ、其の方法に依つてのみ暫定的價値は確實性を有つに至るのである。斯くの如き相互關係の體系中に入り來る判斷は、其の體系を支持し、又それによつて支持せらるるのである。「全體は諸々の部分に依存し、その代り其の諸々の部分を支持する。而してこの相互關係を通じての相互扶助の有機的原理こそ理性といはるゝものである」。と(註一〇)

而して不完全ではあるが進歩的である限りに於て、そは有機的衝動であると名附けらる(註一一)。

以上の簡單なる紹介によりても知らるゝが如く、Hobhouse は吾々が單に或る刺戟に應じて形成する判斷を immediate judgement と稱し、その特殊なるものを感官の判斷とするのであるが、又彼

は immediate judgement の一般的なるものを直覺判斷（intuitive judgement）と呼んで居る。Hobhouse はこの直覺判斷に就いても、その各々に暫定的價値を與へ、感官判斷に於けるが如く、その確實性はたゞ他の判斷との相互關係に於てのみ要求する事が出來るとする。斯くて Hobhouse に依れば(註一二)、理性は相互連結の原理であつて、その發見の歸結が眞理であると云ふのである。

而して、實在の全體は吾々の經驗に包括し盡し得ないが故に、その相互連結の原理は決して完成されたものではなく、從つて理性はその解釋に對して終極性を要求し得るものでもないと(註一三)。而して、合理的なるものは、現在符合する諸判斷の體系へ組み入れられたものである。猶、Hobhouse の見たる實在は相互依存關係にある諸要素の體系であつて、そのうちには目的論的要因と機械論的要因とが並立するのである。而して前者は即ち心であつて相互依存關係に於ける交互作用によつて調和に向つて働くものである。後者は此の相互作用依存關係にあらざる諸の要素がそれである。

以上吾々は合理的規準を尋ねて Hobhouse の論述を偲び、理性が遂に有機的衝動であり、その職分は經驗の調和であるであらうといふ見解に達したのである。彼は認識論上の主觀として心理的、生理的なる經驗的自我より出發して、常識的に存在するものを心の外部に實在するものとしてゐる、即ち彼の見たる人間は全く自然の子であつた(註一四)。

換言すれば、Hobhouse の認識的主觀は心理的、生理的、個人的なる經驗的自我であり、その立論は發生的である。即ち常識的考へ方である(註一五)。

さればその理性もあくまで、衝動に側せらるるものであつた。この點より見れば Hobhouse 教授は心理學者である(註一六)。

次に、Hobhouse 氏は自我實現說に對して次の如き立場を取つてゐる。即ち(イ)善の感情的要素を過少價したること、及び(ロ)自己犧牲と云ふことに關して、余りに樂觀的なることを論難してゐる(註一七)。

各人の人格の完全なる調和的發展――社會的人格――は共同善の條件であり、社會的調和が完成されたならば、その全體の善、即ち共同善は各個人の善の綜合であると云つてゐる。然しながら、元來社會的調和は道德的紛糾の條件の許に徐々として發生し來り、發達して行かねばならぬものであつて、それは事實完成するものではないのである。されば、一定時に於ける社會的秩序の實際的必要は、より高き調和に於て認めらるる發展を切斷しなくてはならないのである。即ち、或る個人は犧牲とならなくてはならぬことがあるであらふ。この個人は明らかに、彼の幸福が存するところの內部的調和の發展を成就しないものであつて、此の場合、犧牲にされたるものは社會的人格として共同善に對する個人的寄與をなす所のものである。然らば、斯くの如き犧牲は實に手段であつて、目的ではない。即ち、それ自ら善なるものではない。犧牲がなされねばならぬといふことが現在の社會的秩序を進歩せしむるために要求されるならば、その事情に於てのみそれは社會に取りても、個人に取りても亦最善なるものである。

然しそれは個人に取つて、一般に個人が到達せねばならぬものは、個人の幸福であるといふ意味で善なるものではない。合理的なる善とは後に述べるが如き獨立單位としてこの個人に對する善ではなく、個人がその一部分を構成してゐる所の全體の善なるものである(註一八)。

されば、あることが善であつて、それが根據あるのはそれが全體の善を增進させるが故である。而して、その善が完成されたならば、こゝに考へるやうな個人の犧牲といふやうなことは意味しない。自己犧牲と云ふ個人の義務はその全體に對する關係に於てつくられたものである。されば假令、

吾々が自己犠牲に於て、個人はその最善をなすものであるといつてもそれは自己目的ではない。人が犠牲に依つて失ふものは、彼の人格及び、それに附隨するところの幸福であり、而して得る所のものは、窮極の調和といふ意義をもつてゐる。即ち彼の生活と、より廣き生活との全體的同一化である。これは嚴酷なる事情が彼に割り當てるものであるといふ意味に於て、それは彼の善なのである。然しそれは理想的調和が彼にわりあてるものではないと云ふ意味に於て又彼が若し彼自らの立場から事實を考察したならば、彼が選擇したであらうところのものでないと云ふ意味でそれは彼の善ではない。

然らば、自己犠牲に於て、個人はその善を失ふものであるか否かと云ふ問題に對しては、その意味する内容に依つて或は肯定し、或は否定しなくてはならない。彼はその善が、社會全體の善と對立するものと考へる限り、彼はその善を犠牲とするものである。この犠牲に對する理由は彼にとりての善なるためではなく、只々全體の善のためである(註一九)。即ち Hobhouse が如何に唯名論的個人主義者であるかは、理想主義者にとりて用語の矛盾と思はれるのである――此の「社會全體の善と對立する」個人の善を考へることに依つても明らかであるが――。

而して斯くの如き犠牲の必要は、實に現在の社會秩序の不調和に基くものである。斯くて Hobhouse 教授は『自我實現と云ふ言葉は倫理學上の根本的難關を、余りに樂觀的に解決するものであると斷案を下してゐる。吾々は上述の紹介によつて粗略ながら Hobhouse の基石とする所のものを考察し得た。即ち哲學者としての氏は經驗的進化論者であり(註二〇)、結果論者であり、その窮極の立場は英國の傳統的自然主義であつて、特に J. S. Mill の經驗主義のよき後繼者である(註二一)。

次に Hobhouse は倫理學上の絶對說と快樂說とを巧みに採長補短する事に成功してゐる。氏は The Rational good の最後の章に於て(註二二)、ミルの功利主義に對する自說の類似と差異とを述べ同時に Green の理想主義に對しても自說の立場を明らかにしてゐる(註二三)。吾々は飜つて、彼の功利主義に對する批判をきゝて以つて、彼の認識論上の若干研究を終りたい。

Hobhouse は、先づ、功利主義の快樂と幸福とを同一視する事に反對する。經驗と感情との調和は快樂又は幸福の形に於て意識のうちに現はれる。されば Bentham は幸福を以つて苦痛の欠如、即ち快樂を意味するものとなし、J. S. Mill も亦幸福は快樂の總計なりと云つた(註二四)抑も快樂とは其の時時に依つて强弱大小がある。一時的なる心の狀態である幸福とは快樂と同一の感情の調子を持つた心の狀態であることに相異ない。即ち感情を除いては何の幸福もあり得ないであらう。然し幸福と快樂とを同一視してはならない。幸福といふ時、吾々は全體としての人格の或る安定的、恒久的なる條件を快樂に見出すことは出來ない。隨つて、幸福に於ける滿足には二つの條件が必要であらう。

第一には、心が内部的調和の狀態にあること。

第二には、吾々自らの生活を超越したある對象が必要なものであること即ちこれである。

綜合原理たる人格と、綜合の素材たるところの繼續的衝動及び經驗との間には思想上明白なる區別があるであらう(註二五)。

註　一　Hobhouse が「哲學」に與へたる形式的定義とは、即ち「哲學は實在一般への一つの合理的解釋への試みである」(關與三郎氏ホツブハウスの社會學說 p. 6)「Philosophy is the attempt at a rational interpretation of Reality as a whole. In the course of its development it has given rise to numerous special sciences, each of which is the attempt at a rational interpretation of Reality in some part or under some aspect.—contemporary. B. Philos. I.

The Scope of Philosophy p. 151.」と云ふことである。Hobhouse の哲學は英國傳統の經驗派の特質を帶びてゐる。（關氏上掲書 p. 8）英國傳統の經驗派哲學とは大陸の哲學——即ち (1) 合理的演繹的方法 (2) 本體論的特質 (3) 形而上學的思辨的興味を有するもの——に對して (1) 實驗的歸納的方法 (2) 認識論的特質、知識論的特色（locke の心理學的特性を帶びたる）(3) 實踐的倫理的興味の三特性を有するものなり。（James Seth: English Philosophy and Schools of Philosophy. 1912）以上は英國哲學の內容的特質である。が然しその形式的特徵は枚擧に遑がないであらふ。（cf. H. A. Taine: History of English literature, 1863. introduetion, H. T. Buckle: History of Civilization in England. vol. I. p. 213, 河合榮治郎教授著　英國派社會主義、上掲書 p. 18-20）

而して、ホッブハウスの哲學の特質とは (1) 彼が重要なる如何なる意味に於ても先天的にして、且つ經驗以外の要素をその認識の成立過程に於て必要視せざる點（cf: Theory of knowledge, introduction), (2) Green の精神的原理をフリッチェスに示唆を得て經驗的に理解する事に依りて A. comte の「人道」の概念に到達したる點（Con-temporary. B. Philos. p. 150), (3) 或る少數の概念に關しては思辨的に究極眞理を尋ぬ試みを採らぬ點（cf.: Theory of knowledge Part. II. Chaps xiv. B. C. B. Philos. p 150), (4) 經驗科學を哲學の非界に於いて重視する點に於いてである。（Contemporary. B. Philos., p. 152）又內容的に見て Hobhouse の哲學は實在論的であると云へるであらう。而して眞理は徐々に其の形相を現はすものであると考へる點に於いて Hobhouse は彼自身の哲學を "Philosophy of Development" 發展の哲學とも稱してゐる。（C. B. Philos. p. 151）即ち一種の進化哲學と云ふべきであらう。從つて Hobhouse の哲學は眞理認識に於いて相對論的傾向を持つものである。經文一二　戸田武雄氏ホッブハウスの思想體系 p. 81, H. Carter: The Social Theories of L. T. Hobhouse. p. 132. The works of Hobhouse will long endure as the monument to a great intellect and a colossal attempt to bridge the distance between philosophy and a science of society)

註一一　Hobhouse: The Philosophy of Development. p. 154

註一二　Hobhouse: The Rational good. pp. 56-57. 關田氏譯本 p. 103. 佐藤氏譯本 p 103 松本潤一郎　現代社會學說研究 pp. 332-333.

註一三　Hobhouse: The Rational good. pp. 56-57. 同譯本（佐藤氏）p. 103.

註一四　op. cit., 譯本 p. 104

註一五　Hobhouse: ibid 譯本 p. 106

註一六　ibid. p. 58. 同譯本 p. 107.

註一七　經文一二號 p. 83 戸田武雄氏、ホッブハウスの思想體系。——而して、又 Hobhouse は直覺判斷をある意味に於て肯定し、ある意味に於て否定してゐる。

註一八　cf. Hobhouse, The Rational good. ch. iii. The Rational.

註一九　經文一二號、戸田武雄氏上掲論文 p. 83 此の相互關係の體系に入り來る判斷はその體系を支持すると共に又それに依つて支持される。此の相互支持の有機的原理こそは Hobhouse の理性である。

註二〇　cf. Hobhouse. ibid—譯本 p. 120

註二一　cf. ibid

註二二　戸田武雄氏、上掲論文 p. 83

註二三　Soc. Evo. & Polit. Theo.p. 116. 社會學の取扱ふ所のものは人である。彼の見たる人は自然の子である。

註二四　即ち具體的人的存在に就いて考へるの意味であり、常識的に「在る」といふ客觀的事實より出發することに於て明らかにフランス哲學の傳統を引くものであらう。戸田武雄氏上掲論文 p. 84）

註二五　Hankins 氏は Hobhouse 氏を集團的心理學派に入れ、協働關係を說く C. A. Ellwood, C. A. Cooly, R. M. Mac-trer と同視してゐる。（Hankins: Sociology—The History and Prospects of the social science edited by H. E. Barnes, p. 314）又集團說を說く L, F. Ward, L. Stein をも同一視してゐる。猶、Hobhouse の社會學說上の地位に關しては、松本潤一郎氏　現代社會學說研究（pp. 322-327）を參照せられたい。

註二六　cf. Hobhouse, ibid, pp. 141-145. 戸田武雄氏上掲論文 p. 87.

註二七　C. B. Philos. p. 154 には「合理的なるものとは何であるか、而して吾々は何が故にそれに對して最高の位置を與へるのであるか、之れに對する一般的な解答は左の如くである、即ち合理的なるものとは我々が理解し得る限

りに於て、明らかに表現せられて居る全體（articulate whole）なのである、そしてそれ故に合理的なものとは如何なる部分（part p. 12）よりも上位を占めて居る」とあり、而して早大教授關與三郎氏は右の文を引用せられて、注意すべき諸點を左の如く列擧して居られる。（關與三郎氏　ホッブハウスの社會學說 p. 12）

（A）（I）合理的者は明瞭に表現せられたる（II）全體である。

（B）明瞭に表現されて居る（articulate）と云ふのは有機的又は組織的の意味であらう。

（C）全體（whole）――これは「我々が理解し得る限りに於て」の全體である。そこには進化を容るゝ餘地があるのである、それ故に合理的者も亦科學的原理たる「進化」を離れることは出來ない、かく全體は進化するが又それは「綜合」に於て包括せられる。即ち――全體とは綜合に依る概念である（C. B. Philos. p. 152）

（D）全體は部分の上位である――The whole is Primary, the separate cells have relatively little independence and the organs become depressed almost to the level of instruments. (C. B. Philos. p. 168)

註一九　C. B. Philos. p. 154.

註二〇　松本潤一郎氏　英米社會學　上揭書（p. 150）

註二一　Hobhouse の合理的善なるものは吾人の心的諸要素の現實の傾向を肯定し且つ之に立脚せるものである、合理的善は外部から與へられるものでは無くして、いはゞ吾人の心意から生み出さるゝものである、從つて根本に於て氏は自然主義に據るものと認めねばならぬ」（松本潤一郎　現代社會學說研究 p. 355）（C. B. Philos: p. 150）

註二二　ibid, chap. viii. Implication. p. 137-162.　同譯本（p. 271.）

註二三　松本潤一郎　上揭書（pp. 335-336）

註二四　J. S. Mill の倫理學說は所謂功利主義であつて、Bentham の最大多數の最大幸福が道德の標準であると云ふ所の快樂說乃至幸福說を信奉せるものである。即ち Bentham の科學的快樂說（scientific Hedonism）を採る。

註二五　前者には意志 Will なる行動の方式と幸福なる感情の方式とがこれに屬する。後者には慾望 Desire といふ意欲の方式と快樂苦痛の感情の諸方式とがこれに屬する。――cf. Hobhouse The Rational good. pp. 137-183. 同譯本（p. 272）戸田武雄氏上揭論文（p. 87）を參照せられたい。

四　社會哲學上に於けるホッブハウス

彼の社會哲學は彼の論理學の一部門にして、それを通じて彼の哲學に關係してゐる（註一）。

即ち、Hobhouse に依れば凡て人間は夫々他人に對する無限の關係の裡に在る一つの中心であつて（註二）。意義的なるものにもせよ、然らざるものにもせよ又協同的なるものにもせよ、然らざるものにもせよ、その關係は、一般に社會的といはれ、その本質は心的相互作用（The Interaction of minds）である。

斯くの如く複雜なる網狀をなせる社會的關係は一定の限界ある全體を形成するものではなく、無限に擴がり、一定の始めも終りもなき構造をなすものである。然しながら、此の無定形の構造のうちに吾々はその相互關係が永續的にして限定された人類の集團を認めることができる。斯くの如き集團は吾々が一般に社會と呼ぶものを構成する。嚴密に云へば人類の起源を除いて社會の起源といふやうなものはない（註三）。

是等のうちの最も簡單なるものは配偶關係、親子關係であつて、そこに血緣關係が發生する。恐らく重婚に依つて、異なれる家族は次第に共同社會なるものをつくるに至つたのであらう。その起源は扨て措き、一般に共同社會は共同の情緒乃至利害關係に基くものである。それは未開人の間には稀なることであつて、斯くの如き平和的秩序ある關係に根本的に必要なることは、各人が他人に對する關係を明確に理解承受してゐると云ふことである。されば、斯くの如き社會は其の吾々の構成員に依つて、一般に、承認されたる行爲の共同規律の體系に依るものであつて、その社會の情緒

に依りて、又は或る統制の機關に依りて、維持せられて行くのである。是を要するに、共同規律を持つ全人間は共同社會を構成する。而してその社會的關係は無限に分岐する(註四)。

然れども、それが特殊の統一を有つ社會的構造を生ぜしめないならば、共同社會を構成するものではない。共同社會の形成に必須なるものは指定しうる限界をもつた或る特定の構造の人間が一般に承認された共同規律を守るといふ事であつて、構成員は共同の情緒或は利害關心に依つて結合せられ、形式上の構成と統治とは必ずしも共同社會の必須なる條件ではないのである(註五)。

これらの規律は無意識的なる慣習から漸次發達して法律並びに形式上の權利となるのである。社會制度なる語は Hobhouse に依れば、

(1) 人的關係、又は他方に於ては或る特殊なる職能を營むために結合せる人類そのもの、或は(2)人間の或る關係を支配する所の承繼され建築された諸慣例、或は(3)斯くの如き慣例の全體及びそれを支持する原理、或は(4)斯くの如き全體を支持する組織をいふのである。

之を要するに、制度は一方に於て人的關係の表示であると共に、他方に於ては、或る特殊なる職能を營むために結合せる人類そのものを指示す。Hobhouse は制度といふ時上述の如き諸關係、並びにその全體及び原理を指すものとなし、或る特定の職能を營むために結合せる人類の組織を特に結社（association）と名づけてゐる(註六)。

即ち、共同社會のなかには學校、教會、組合、政黨の如き多數結社が存在なし、何づれも限定されたる職能を有つてゐる。然しながら、結社はそれ自ら完全なるものではなくして、共同社會の生活の一部分をなすものに過ぎない。而して國家は共同社會の共同規律を維持するための機關である。即ち共同社會と云ふ時、吾々はそれに依つて共同規律が維持せらるゝ法律、統治、防禦の構造を意味する。されば、國家は共同社會ではない(註七)。それは、諸制度の體系であり、從つて結社である(註八)。

民主的國家に於てはその構成員は即ち共同社會の構成員である。それ故に、國家は或る目的のために組織された共同社會と考へられることがある。然し國家の諸制度は共同社會の全生活の一部分を構成するものに過ぎないのである。民主的ならざる國家に於ては、國家は共同社會の一組織たるに止まる。否、共同社會をも持たぬ單なる組織たることすらあるであらう。斯くの如き場合に法律を共同社會の意志を表現するものと考へるが如きは疑ふべきではあるまいか。こゝに於てか國家は要するに主たる職能、即ち法律の規定實施、及び共同防禦が分化調節される一構造たるに過ぎないのである。

以上は Hobhouse の社會及び國家に對する見解である(註九)。

要するに、氏の社會哲學は社會生活そのものの價値の論究であり、理想の闡明であつて、メエリス及びリッケルトの歴史哲學の如き文化價値の全體的考察乃至シュタムラーの社會哲學的考察ではなく、むしろ氏の社會哲學は Mackenzie の社會哲學に類するものであらう(註一〇)。

而して、氏の社會哲學とは社會生活の目的、理想を闡明する事であつて、政府の行ふ政策たると個人の行ふ行爲たるとを問はず、凡そ社會を現在より住み心地良き人の世たらしめんとする凡ての行動に不可欠の要素であり、斯かる社會哲學の闡明する目的理想が事實的社會進化の上から可能の事であるや否やに依つて、社會哲學の價値は判定さるゝ可きものであると云ふのが彼の根本思想であらう(註一一)。

而して、Hobhouse に於てはその社會哲學は道德哲學（倫理學）の少くとも一部分であらう(註一二)。